

度邊萬十廿

かゝりのあきた



返々一室寂也

宵

月日二百年の己家ありてり
月日二百年も又旅人也。母のよまは生涯
をうくるの口そきて老をむ
ふらむわたり旅うて旅を柄を
取人も多く旅よ死なむなり
うもいづれの手より片まの風を
はらうられて漂泊のまひやうす
海濱くまもくまの状に上の



破屋より 蜘蛛の古巣をさくして
やきもきもまじく 糸のきり
白川の舟とんとそら神の物と
はさして 心をくらにせぬ 祖神のま
まよあひて ぬのまよつとすも
引の碇をつかり 雲の流るゝして
と炎のゆるり ねの月とさく
うらりて 流るすいん 流る 移風

別路より 移風より

つら乃とくも ねの月とさく
面ハ白を 流るの流る 糸のきり
糸の七口 相ふの 糸の流る
まよあひて ぬのまよつとすも
あこの 糸のきり 糸のきり
糸のきり 糸のきり 糸のきり
まよあひて ぬのまよつとすも

まて送らふのいとふあそ船
を何れもあ運三ふこのぬひ
物さあさうりて幻のちさう
離ふの酒をこしく

の春やもあ時一桑の目ハ酒
をささきのとて行通るを
うまう人こハあ中一よさうさひ
てほけのさゆらさハと足さるん

こしくえ縁二とせしや奥羽も色
のり物さうらうさうさひをらて
あまこら髪の色をこさあといへ
年と物ささいさいあさうさうさひ
あしてゆくと定らさうおのま
まけ其日何早加とさあ
そまこらうさうさうさうさ
うぬらぬえらうさうさうさ

ふと出立の竹を御中子つゝはハ舞の
降るゆゑに西貝を筆の末を
あつゝハよりうまきし 降るととらふ
さうらよみお終へては流の燈を
あわらふりあられ

室のハ流う降す同行常え、此
神ハ木のもはくや作の神として
留す一祈也無戸室入て燈のふ

らういのみ中うぶこ出見のみと
まれのむしより室のハ流とす
燈を後わらし作もこの流也將
このと流とりふ鳥を 林あり縁記
の音せしはふ半七行

ホ。日光山の林あり、御ちあるの
云々多や、旅名を伸立たふと云
芳心出を首とするをよ入るふ

尸物一箱のあつた物もあつて
体いふといふもの湯せを
示現していふも業の元食順記
こゝろの人をきりけりやと
いふのあつたは心をとめて
みるよ唯す皆すかぶる心
は偏回の者也剛毅本調の行
をいふをいふと氣稟の性質を

さるる

卯月朔日師いふに備ぬすは言
此山をいふと荒山と章をいふ
大師開基の時乞とあつた
歳未年をいふとやと此
師乞一と云ふとやとて思はる
こゝろに民あつたの極極なり
相照多くて言をいふ

何くぞうと尋ねるもなみの光
思盤の六旅りりてさういさ
白

利捨て思盤のうり衣文衣文
常衣ハ何分衣うしてあかるとり
芭蕉の下梨より衣をうるとり
薪水衣ををうるとり
ねーよ家傳の靴共くさしやを

収ひ且ハ羈旅の靴とりとりと
旅之境の衣を利して思盤の
をえし衣五を及て宗悟とす
仍て思盤の衣を衣文のと
字力ありて
衣餘丁衣を衣文にして思盤の
頂より思盤にして思盤の
思盤の衣を思盤の衣を

ひろり入て滝の裏より流れはう
らみの麓とP傳しなる也

暫時ハ流よれ物もや夏の物
那頃の星と云ふ人あれ
是より野を二つりて 並んを
ゆくとよみよ一軒をこえしけ
り又雨降日さらけ農家の家
よ一軒をりてゆれハ又野中

をりるこハ野畑のるあり
野刈りのこよみけしれハ野
といともいよるは 情もぬよ相
いくまよやそれとも此野ハ縦横
よちれてうかく 旅人のる
あききしあやう けれハき
のきも所しきをよと
うーゆめちよき者ぬいの

張をいいてうらむ持ハ小張を
名を撃しゆとせうれぬ人の
やこしうらむれえ

のけぬるハ名持子の名敷を交
好て人望よむれハあしむを執
つるハ張をゆるをとりぬ

黒羽の館代降格ちけりのま
馬修え さいうちぬあしののぬひ

日ぬ後つりて 共舟桃ぬまうと
ちの羽夕勢とやい自のあま
とけしむ 親一扇のまうとまぬ
のとりをぬらあしりしむ 郭外
上道定して 大正初の終を二んじ
那須の陰尔をありて 玉藻のあ
古墳をうらむれちり八幡宮と信
与市扇の的を射しけりしとハ

ふふ氏神正心とらふて
其神江くちとまはてきふ
とまらりまきくふらきれ六枚
定りる

欣驗光明寺と云ふとまらふの
道てり者堂をぬす

友山と足妹をぬし首途
高木雲岸るのわくし物頂和る

ふねたまり

三横の五天とまらぬるの
むよまかくかし西るらさハ

とねの岸して定くちをゆり
いつらやけくく其はんと雲岸
さよ板をぬし人くまんでき
いとらひまき人まらくたのり
あさハふしぬらく下被れり

ふいやくあちきくさよと谷
あちきくさよと谷
月のも今 ねきく 十系あちき
橋をわさるふくふ川入
さてこのたいつくのちきく
ふふふのちきく石上の小菴 石
窟ふふふふふふふ禅師の死園
法堂は師の石室とみきく

木啄も福いやくすふ本立
とちあちあふくをねくあち
そちあち石より 皺休ふく
ふふふ送るふ此の付のみの短冊
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふ

師を橋よるふふふ
教ふふふ温ふふのあちふふふ

石の毒を食ひつゝさへあつひす蝶
蝶のまらひとらぬのさのさくちを
のささうらふたすふほあつひすの
柳ハ昔柳のまゝありて田の畔
上柳ハ此柳の郡守戸部某の
此柳みとる中もよくあつひすのさ
あつひすのさといつゝの年と中とさ
しを今も此柳のまゝありてさ

ささうらふたす
田一枚極してまきさ柳は
少許うらふたす日さすまきさうらふたす
の柳ささうらふたす旅にまきさうらふたす
都へと使來しとあつひす
此柳ハ田のささうらふたす
心をささうらふたす
あつひすを伴ふてささうらふたす

何れ也 卯の糸の糸の糸が上段の
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸

卯の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸
糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸

よ 岩城 桐馬 三春の庄 菅原 地
の地をささむてふつふらうけはと
まをりよ今ハさき量てぬ
部つす 丁川の澤と等窟
とよまをささむてふつふらうけはと
先白河の園いこうこえつふらう
同と途のくろくみさ心つふらう
風系よ 滝うりき 懐いよ 掃を

断てるくううらひくらうす

風流の初やおくの田植うし

そ下よこもんとてさうらんとて流きそ

流すことつらそとそとそとそ

此岩の傍よ大きらるる雲の影

をきものこし世をいそし俗を豫ひ

ろよあふもくやと圃上をうりて

あの上をうりちち其詞

栗とりのぬみの字ハ西の本とがて
西方浄土はありとい基言薩
の一生状しと極も此あるを司
のやとや

世の人乃足せぬまや軒の雲

等空腐らるもとて五里斗花皮

の岩を維道てあまう山を路り

道一はありは多しうらと川

とやとととととととととと

あつしこはまきし人まゝのちれ
そとあまのまははをる人う
さうらうしこはまきしこまて日ん
山の端まうらぬこおしりちま
まきしこ黒梅のまきしこ

福子まわらあくれはまのすちら
のるをらそあまのらまうら
あこらまのまま石ままま

りり星のまアのまらてまぬら
昔はまのま又まをまのま
ままをまてはるをまを
まみてま谷まつまをまの
まままままままままま

早苗まらまらまらまら
月の端のまらまら

那ノ土中ニ走るをみてあや
さ負負し灯もろろれはか
この火うけしは性あをまき
卦すある入て雷鳴や西より又
降てあふとよりより登あ
そとをまきし脚すああ
おろりて滑入平みろし
えしやしくゆれん又旅をぬ

行あのみ余波いすま
業れの深くあろろろ
まをいそいで、ろろ病
とつと罷旅邊との行脚捨身
無常の観念道路子ま
の命うりて、き力脚り
踏て 行きの大本
産をこす 宛招 石の機をさ

笠嶋の郡に入道の者中おまよ
の塚についてのをとらんと人ま
とまらぬとちくこにゆらら
の星をこのまを笠嶋と云はれ
の社々々の存今よりありて
これらの五月節よたいとあ
あつられはれとよふるく
るるまを義場笠嶋と云はれ
のありはぬと云ふ

笠嶋はいついさ月のわらた
志派は宿子

我隈の村よとよらるる
根ハ土除より二あよわ
のまらぬと云ふと云ふ
は所より出はるる
下かし人此を体と云ふ

の橋杭よきれきもつらうら
きはしやねにけしひたもさうとに
海よりゆくあるハ伐あるひハ極
継ぎとせやゆまは今將子歳
のさうさめあひてめくさ
ねのさうさうらんね

武隈の初めとやとまはつと
とまの候ふとさうらんねハ

桜よりねハふあを三月越し
名取川を流して仙流よ入あや
ゆかりや藤花をさめてはあわ
運らぬす空まよ書工かたつとま
何れ師心ある者とゆきてあは人
よるまこの者まよとさうらぬ
名まらるを考まねれことと
一口筆めす宮城邦のまはる

あひて秋のうきとこひみや
玉田よこ邸つてく園からきひ
咲くら也日敷もりぬ松の栞り
入て室をあの下とらさう若も
うく家ぬりけきハくふとさうひ
このさといふみふれ若師を天神
の社もとぬりてさハくれぬ
私修院のうのや言はてて送る
寝組の深きつけさ草鞋三
修すこれハ糸尻のしきあ
室のこむりて其室をひす

あやめ物三と旅人若の靴の
よの畫圖くおをてきとりり
おくのぬたのら係く十着の
若を今し十年こ十着の若
を洞て園さくく献てとさう

黨碑 市川村多賀城と有

つふの石也といふ向廿六尺餘横三二尺身
凡若と穿て又字也四維國
界之形星と云ふす此城神龜元
年梅察使鎮守府將軍大野朝臣
東人之所星也天平宝字六年參
議東海東山節度使同將軍
惠養朝臣獨依造而十二月朔日

と有聖武皇帝の市川と當ルル
むしりよりよみありを松ありく
鏡作女といへし山崩川流ては
河つたふあり石の埋てふよりこれ
木ハ老てもあふよりありこれ
代多ありしと云はれしと云ふ
のそをいふありて疑ふこと
歳の記念今願ふは古人の心

を淵すり流の一は存命の
収む籍旅の昔とわかれ
洞と流るるなり也

ふれり神田の玉川 仲の名を流ぬ
末の松山とて流して 末松山とて
松のあいこ 皆流つるもそを
ふりて流とつてわらぬ馬の流
ここのこととてせしむるは

流りすの浦へ入おのりゆをすり
ぬのそし神を流して 夕月を流す
や流るる流も流るる流 流の流を
まつて流るる流を流るる流
て流るる流を流るる流を流るる流
いよと流るる流を流るる流を流るる流
流るる流を流るる流を流るる流
ものを流るる流を流るる流を流るる流

とよあけのひるひをくら洞子くら
とそく枕ちりくくまきりれとさ
すふふ色土の遺風忘れさるあ
くく舞舞くくくくくくくくく
の明神く清國守再興され
て空櫃くくくく新塚くくくく
のよ石の階ち便くきり洞日あ
ちの玉くくくくくくくくくく

早き土の塚くくく神雲あくく
くくくくくくくくくくくくく
いと貴くれ神あまちよ宝焼を
くくくのくくくの向よみはくくく
くくく奇進くくく五ちくくく
今日の前くくくくくくくく
くくく渠ハ魯義忠孝の士也佳命
今よあけくくくくくくくく

誠人の道を知りて我を導く
名もなきいそよとてしる日
既午よりしる船をりて
松崎のまはる
其間二里餘 碓氷の坂より
柳よりぬりまはる 松崎ハ林業
この好風よりて 元田江 西側をぬす
東南より海をへて 江の中 三里
湘江の淵をきくふ 舟のぬす

あつて 歌のふ天を括ぬすの
かほよ 旬旬あつて 二とよのうら
三堂よりとて たよわれ 右より
ある 負より 抱きあり 児孫を
うとよ 松の縁こまや 木葉
は 風よ 吹くは 屈曲をのつ
きあつて 其を 宵然
として 美人の顔を 移らるる

神のむし〜スルすまのふさるわい
よや造祀の天スいつまめ人の筆
をふらふら 何とよはす

唯神の故に地つそそ海ふあふ
後也雪飛禪師のお室の泣
雪程石ころり將杉の本は
世といふぬ人も歸く〜
落穂程心ころりけりわあ〜

菴岡の修み〜い〜の〜人〜
ま〜れ〜ま〜ま〜ま〜ま〜
か〜ま〜月海よ〜つ〜つ〜
又あ〜ま〜じ〜お〜ま〜
あ〜れ〜六〜窓をひ〜ま〜
風雪の中よ積りあ〜
あ〜ま〜ま〜ま〜
ね〜時〜や〜
お〜ま〜

早ハ口をくちくちとて 睡んしんしんね
らききす旧居をわくし 時をを
松崎の 待あり 京あ高 ねい
とよの 水うを 流るる 待をこねて
こいひの 夢すす 杉風 獨子
そのつあり

十一日 瑞雲 ちよ 宿 ちよ ちよ
世の昔 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

八月 神 細の 宿 用 ちよ ちよ
雲 水 禪 師の 法 化 ちよ 依 七 堂
夢 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
仏 土 成 就 の 大 伽 藍 ちよ ちよ ちよ
彼 見 仏 聖 の ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
十一日 平 和 水 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

もしわすれぬ路をたもとて
石の巻とて不滞よおこしぬふ
とよみえなより金花山海を
足やう 数百の廻船入らよつと
ひ人尿地をけうりひて毫の
煙立つてきよあひひうあす
あよももれるをとあふんとすん
とよよあふす入るう 海をよ

小島よ一おをけうしと 叩ねん
みろわたりすよひり神のやあ
辰婦らの牧場のきさうとよふ
りよみえあころる 境をわいひ
きよぬようりて戸伊ととよ
一はるしと 平泉よあふ共剛
余呈らうしと 少もあ

三代の業一膳の中しと

大門の北ハ一里ノ所ニ有テ考衛
ノ北ハ田原ニ有テ金鶴山ノ北
形を好ス 乞ニテ館子ノ形
カ上川南部ナリ 傍ニテ大河也
衣川ハ和泉ノ城を以テテニ館
ノ下ニテ大河ニ落入康衛ホ
ハ北ハ衣ノ川を隔テ南部
を以テ堅ノ兵を以テテカニナ

備也義臣ニテ此城ニテ

コリヤ功名一時ノ義と云ル國破
きて山河あり城春ナリテ草
生みナリト云キ亦亦ニテ時ノ
ツヨクニ河を以テテ作リぬ

ニ有テヤ兵トシテ草ノ北

知ノふニ兵音みナリ 白毛ニ有 智長

為シテ年々ナリニテ堂開張

す徑堂ハ三將の像とのり
光堂ハ三代の棺を納めとのり
佛を安置下七宝まじりとし
律の扉風よやまき金の板、最
雪よ朽て既頽廢を虚の最
と成くまきを四面新よ圍て蓋
を覆て風雨を暖物付も成
の記念といふなり

五月ぬの沖のしつや芝堂
南戸道ぬらふとやりて雲の
冥よ深うふと深き川の中流を
とてあるこの流より尻前の淵
よりわけて出羽のあまのこ
此路旅人帰るありあるは
開きよちやめしめて海を
開をらす大ふをのりし

日設きりねえ封人の取をえ
うけて念を必じとら風ぬあれ
てよりあさひ山中よ遠くあし

登りぬるの尿まじり物と

何うのえもとりおぬのあし
大心を痛めてたしこころさ
れはわらふ人の人をれしぬ人
こころしをすさうしこころし人

おゆれハ究竟のふ者及孫指
をよこしえ 櫻の杖を携りてふく
先よこしきしちりあふぬあや
こまきあひをあしこころしと
幸まきあひをあしこころしと
りあひのえよきよりす高ふ
森こころして一鳥さうきすあ
下園あひあひあひあひ

雲霞よつらぬりの地して
篠の中踏をく水をわらうら
よ礫て肌よつらぬ汗を流
しそ家上の店よお川よの
葉わらうみのこのまやけを
必る用のすそをさうら
まらせえ仕合とらうとら
これぬはよすてえ約うら

乃も也

尾不澤しそは風と云者を
ぬくはるものるれそ志い
うす都もあまひてさ
うよ藤の情をも知れおん
そりそ名色のいりうら
わらうら

涼しそを秋をうら

遠くよふのやうな下のはいふのあり

かゝるまゝを待たしてゐるのふ

待たすも人ハ古代のよりの

山に願ふよふ石ちとよふまゝなり

慈覺大師の同基くしてお供

田の地也一見すよふくしん

のすもむらゝく候々尾を伏し

そつてはらへ共同七里なり也

日らあつてそつてす 林の坊よ宿なり

あつてふこの堂よのちろ岩なり

ふ巖を堂してふとく 松栢手回

と石たれ若滑よ山石との院こ

廬を叩ておのちろきこくす

さめくりゆんを遠て 仏國を

佐と京山寂寂とくし心す

りのみ

用ふやゆふよとらみ入候の

山梨と川のほとと大石田とと取り
日初を待たぬよちき、鎌倉の程
くちれてとれぬあめじしとをさ
ひき片角つぬりのつをやりとち
此乃よとらりありして新たぬ
道よあみあつととこもみち
とるへとる人へるけれととり
あふしをあしぬこのまの風流
室あよあゆみ

室あよあゆみ
室上川のほとりあてふ旅
を水とよよこしんあゆむとる
あつろしき難あを板敷ふの水
を流て果ハ酒田の海へ入た石
霞ひなきの中へ船を下すし
よ移つてよをよいな船とあ
戸京の海へ昔葉の倦くはあて

仙人を岸より眺てまゝある
まつてあめやうし

五月ぬを待つて早しうる上川

六月五日羽黒ふもむり園司た言
とそ者をつらそ別高代今たえん
園利二福す南谷のふ院す
今して憐愍の情こよや
あうしき

昨日奉りよをわす誅諧具り

有絶や雲をうらす南谷

五口権況は詣當山則願能除
大師はいつとの代の人とまを
とすす延喜式は羽列里山の神
社と有書寫眞の字と里山と
なるとりや羽列黒山と中略
て羽黒山とこすぐ出ぬと

鳥の毛羽を比喩の首より翫ると
凡土記より何となく月云はる
を合て三ととも當寺氏江東
殿子属して天台止觀の月明
らうと田代融通の法の灯をけ
らひて僧坊棟をさへ人供驗
行法を屬し一果山靈地の陰
知人費旦あつら祭學長として

りて座山と渭川へ

八日月山よのりる本端をあら
よ川へけ實冠をいを色聲力
とそあよ及ひしれそ雲霧と
毛の中よ氷雪を踏すのさる
月八里らあよ日月行及の雲園
よ入る阿中すれ鳥はさるこ
頂上子録れえ日没て日影を

釜を瀆し湯を梳として湯を
湯を瀆し湯を梳として湯を
湯を瀆し湯を梳として湯を

谷の傍に飯炊ふるといふは水の
飯炊ふる水を撰て之を子孫傳
して飯を折れ月心と銘を刻
て世子賞さしり彼龍泉又創
を津とや干将莫邪のむすむ

さふ道に堀地の所ありぬ
すさふれまりのりよはつて
とりにやまぬとこ入るるあり
椀のつらとまふひくちありぬ
換雲のりよはつて春をよめぬ
らさとのりのあのカカク 美との
梅ふやまらるるありぬ
傍心のそりのれし 雲ふよといひて

飛さうりてくるのあふは山中の
微みり者の法もさうし他ま
下之を極ます仍てそをそとせしむ
坊まゆれえ阿國園の雲子依て
之の禮礼の句に題冊をす

項はやりの春日の卯の
聖の尊りま河の崩て月の
清きまぬは影まわすは

ゆ色もけふしたの酒を
羽黒とてし鶴の園の城も
氏重行とて物のぬのまよむ
られて誦法一とそあり石
さうぬ川あまきし阿母の
まろく淵法不王とて
をそ名とす

阿母のふや吹浦のまを

暑きりと海よりさきよりさき上川
江山の隆の風をえおとるあつて
今衆はうらふ丁と責湯田の漆
より東北の方らと勢強を供ひ
いさこそそつみえ 甚隆十里日親
やのあつらん汐風とら砂を吹上
雨驟騰とくく多海の山のくろ
園中よ 莫化して雨し又奇せと

もは雨後の晴色又お母交と言
の答屋よ膝をいきてる魚の味
を初と初天能霖て初力と
やうよささし物と初と衆深と初と
うよさし初と初と初と初と初と
ささ初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初
初初初初初初初初初初初初初

の往念をのこす 江よしの内陵
あり神功后宮の御墓と云ふ
を千満珠ると云はふよりの業
ありし事いふにすいころり
事よるは寺のなよのたし
の庭を搦く 風系一脈の勢
あるを南よる海天をけりて
去はるつりて 江よりの西へむせ

の閑浴をうきり 東よの境を築て
舟回まうかたをよる 海北より
ええ 浪舟入るをけりし
之江の縦横一里をり 舟り祀の
うらひて又異なり 祀のあり
如く 家浮ハくむのし
りよ 舟しみをくして 地勢
をくす

家海々西々ぬ絶々新々の子
り部や部はさぬもて海海し

多礼

象浮や新理けふ神々

多礼

ふのふの商人使耳

雲の家やう移とまてう源

名と子 雌鳩の巣をみちる

多礼

後こまぬ契ありとるみなこの家

海河の余波りと重て北陸及の
雲々るを違てのかりい約よりし
うしゆえ 加賀の底まて 戸可里
とづ原の園とこゆまて秋は
の地さきりをはりて 陸中
ふいぬりの開き到るはる九
暑温のそよ神をあるや
病ありて 下をさるや

ふ日ぐちのし脊のおよび傳

荒海や伝後よりと多ふ大は

今日に記しす子とくはたしり

約より一より北国一の新市を

跡をつれ跡れと捲りしを

長しちよ一向傳て前のもよ

ぬき廿のぬき入りといふ

手老いるおのこのふりし交て

物物するしふけハ物伝の玉新

深とらちのむせ海一洋路多ふ

下りて此國はしおのこのりあて

何すハ丘よりくすうめとくしめ

とらちふくし傳をとらやと包ら伝

のよちちけよぬそとぬくし

あふのこの世とあふはしりちり

ふふちちちいぬりしの業因い

うよつううーとゆきとさく
る森入てあーい揺きくーいあーい
むらりり果とくぬ旅路の
うさあうりさあまーいさーい
ゆれえんさくうれももゆきとさ
ひゆん衣の上のり膝よ大さの
めさきをされては縁ゆきとさ
と國をさるすうゆきのさるさる

ゆれとと、あーいあーいさく
うらうらうらーいさ人のりよま
さそりー神の加後うらま
さうらうらーいさ拾てあつ
ささささささささささささ

一家は遊女のゆりさあを月
常さあさうさるん書さうさゆき
くろへは十八の歳とさあゆき

ぬ川をわらうて那吉と云ふ
出擔籠の者信々春らうしよとの
初物の言と多くさよめを
人よあれてそらり五里い
ひひしてひよの山陰よい
花のちぬきうすうられし
のいおのあうすのあさし
いさをとられしうの園よ入

この年の香や
か入右ををぬ
ゆのあさうらりし谷をこ
合は七月中の五日し
大坂よりうよ商人伊藤と云者
そとれか振着をとりし
い突とらよははらよ
あのかくさし
うまのあま

其の足と云ふを促す

塚も初け・家屋もろく・船の風

あつたあつた子
いさるうれし

舳浪ももあまむけや血茄子

途中 喰

何くくと日ハ新屋もあまの風

少ねととあま

とあつたきあや小ね吹

はふ太田の神 社も詣りて

甲冑の切りり 性も原氏

盾も一時的廻るなりと

さうやうも平士のあま

目庇り吹き一もさう

るものありあの金とら

ふ敵形やうりさう

本常と仲系あま

よこめしれ行し 梅木の次亭
ふ保しし 下丸のあまめ
結結しし みるし

ひたむち甲のト乃いんくす
ら甲の屋敷よりしとと根
ふ山獄しし みるしし けいひむ
たのら保し 観音堂ありふ
ふの流を 下丸の 町に

とあささのいしは 大慈大悲
の縁を 安富しし けいひて 那谷
と名をいしし 那智谷絶の
ふらをいしし けいひし けいひ
石ささくし 下丸 極くし
あまめまの 小堂 安富のし
ささくし けいひのし

石山乃石よりし 秋の風

浴泉に浴す其功有明く次
之

山中や菊の香をよみぬるの白

何れとよまぬ久きもの物とて

いまだ山をくしれり又詠詠を

好む浴の自室より草のむし

室よりまわりて江風新し居り

ぬれぬて浴す物て自法の心入

とありて世よきくち功名の

得此一判判日の科を信す

之今又むしし流とらるるぬ

尊衣の腰を物て伝授の

国々物とらむるものありあは

之をとりし

りてきふれ物とてその字

尊衣

とてそのものありし

おりのいふ 隻鳥のわかれ
雲のさうらひのいし ちて又

今日よりやうな 宿止のいし

大聖持の城外全昌寺より
うしーとさうにたかすの地し
あふしあのおはらまのいし

次方無風すやいし
とゆすいあめはあさよ甲

昔も無風をよめていふ
おしあひのいし 宿止
あふしあめはあさよ
食あさよー入かゝいし
いしあひのいし 宿止
いしあひのいし 宿止
いしあひのいし 宿止
いしあひのいし 宿止

庭掃しあはるるよみお柳
よりあはるるよみお柳
の入りそあは柳して
柳のねとるぬ

一辨をかすよのハ月月のねを
は一辨をかすよのハ月月のねを

丸園天龍寺のあはるるよみお柳
丸園天龍寺のあはるるよみお柳

風景色さすよみお柳して
風景色さすよみお柳して

つゆ今迄あまらざる

おきての川はく余は

五十二とらふ入て永平を

下道元經師の御事や 邦様

ふ里を遊てくまら信

経をのりてがふと貴

あとも

福井ハ三里計あれこつ 版

とてあえ ちるよきとあ

浴とくくー 高のふ等哉と

あま陸生といつのあ

江ノよあうて 命を

十ととあかしいと

てととあ将死と

ああれといま

うこくとあ田市中

川のてらあやしののちいふよクと
るらふめえしうひて読む
あこし戸ををうくすた
はしらよとよと河をねん信
いさうらわぬのあていつくさ
あさりかたむのあつむあふ
はあさりいさうとよのふた
ぬりし田あくとるあふとよ

うれに書かぬいさうとよ
いしめいさうとよいさうと
あつむあふとよいさうと
そのあつむとよとよとよ
名月いつくさのみるあつむ
あつむとよとよとよとよ
あつむとよとよとよとよ
あつむとよとよとよとよ
あつむとよとよとよとよ

うぬれては那うあるあつらう
あさむつの橋をわらわして
のきあひぬらう ちよんり
の雨をさして 留瓦峰を
ぬれと燃ゆるかゝるや
まゆ戸をゆきて 十字の
あられつらみの橋を 岩を
しむまの夜月ぬ晴らう

あまのあまうゝあまふい
といえ 越谷のあまふい
の陰晴をわあふと
まほすあふぬてあいの
まゆ戸をゆきて 伸衣
天皇の御
廟也 社頭神 さま
の同1月のあまの
入まを
の白妙をわあふと

往昔おつり二世の上人大形
叢起のよりつらつらつら
を刈土石をさるひ泥濘を
うはつとて糸結は身の内
あり古例今ささる神前
とまぬをさるひつらつら
おつりの形おとつらつら
のつらつら

月流し遊りのつらつらの上
たまの亭ものつらつらつら

西暦

名月やお国日お定る記
十六の穴を森つれえつらつらの
お貝ひらつらつら種の後つらつら
毛丁海上七里あり天尾印果
とそものつらつらつらつら

やうよとてしめさるる僕あはれ
あよりのそと 出風町の
まへり 吹くるぬ 浪にかり
るる海士のあはれしし
さほふきありり 室あよ茶を飲
酒をちりしめて 夕なれ のよ
ひしと 説き 塔より
舞 川原にまうらるる浪のた

浪のあやや 川原にまうらるる浪の
某日のらりし 舟を載し
筆をとりし 舟を載し
浪通し けみなるし 舟を載し
いしりし 舟の 舟を載し
あよをとりし 舟を載し
よ入る 舟を載し 舟を載し
まわり合 舟を載し 舟を載し

て如行ッヤウ〜入集ヨリ家
川子荆口父子其ふお〜
ま〜人〜日〜あ〜さ〜ら〜い〜て〜候
生〜の〜の〜〜あ〜つ〜の〜〜〜且
収〜い〜思〜ら〜さ〜り〜る〜旅〜の〜お〜こ〜と
〜し〜ら〜ま〜い〜ん〜や〜さ〜い〜ら〜ま〜あ〜月
亦〜口〜し〜ら〜の〜ん〜と〜何〜摺〜の〜近〜言
か〜ま〜ん〜と〜よ〜あ〜ま〜の〜り〜り

吟の
ぬいみ
か〜れ〜り〜あ〜

此一書ハ芭蕉翁奥羽乃紀行あり
素竜ノ筆也書ハ縦五寸五分横四寸
七分紙の重み十三貫尾小白紙を加ふ
外ハ素紙ノ波と冷暑行成紙の表
紙紫乃糸糸糸金の書妙なりしと
る白地まわりのわらう及と自筆の書
て隨身ノ後遷居の後門人書
行ふと又古蹟の書門人書

今更身之如似心之機字の正しく如
よきる行れ書有文多ふと相違ふ



京寺町二条上町
井田屋之丞之板

映世車軒

